

LIXIL
GALLERY

クリエイションの未来展

第2回
宮田亮平監修

宮田亮平展

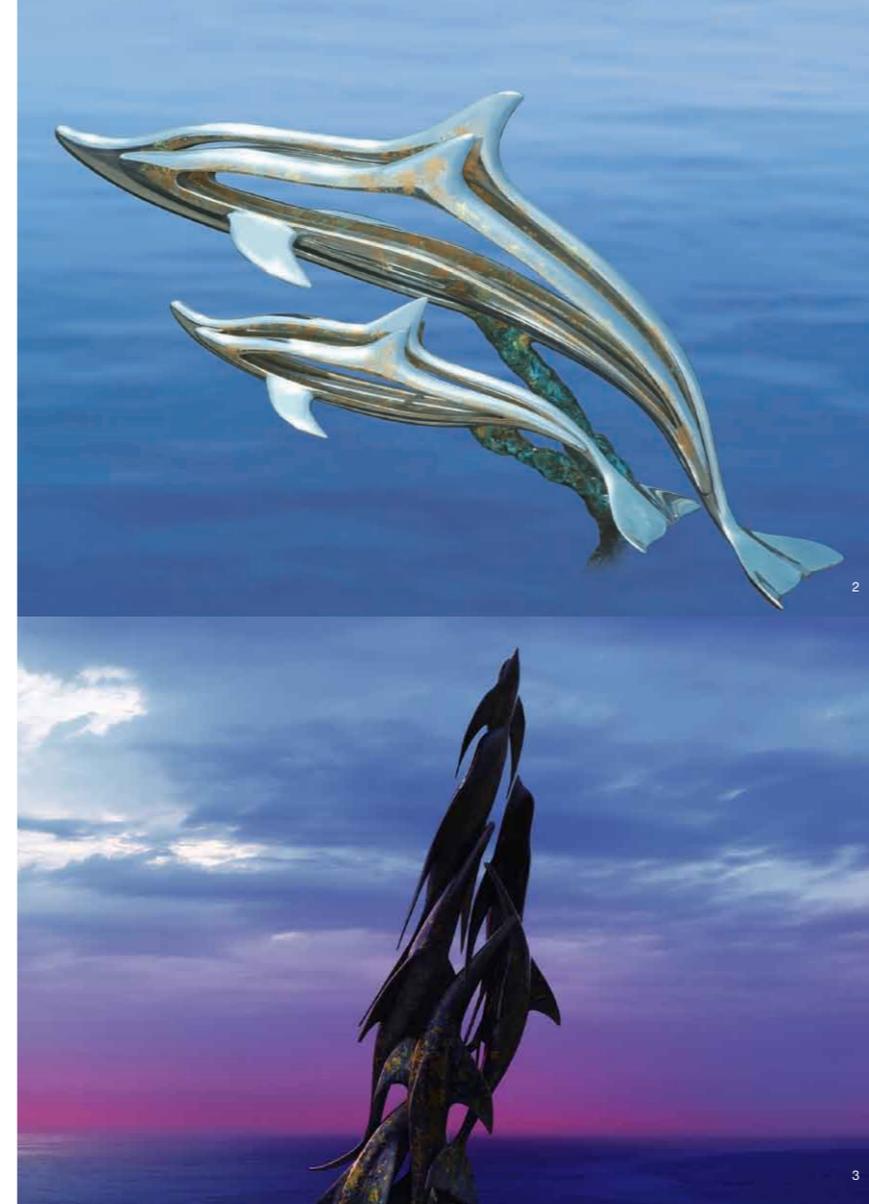
MIYATA RYOHEI

— 海へ —

2014年12月4日(木)～2015年2月21日(土)

休館日 2014年12月27日(土)～2015年1月4日(日)、毎週水曜日

10:00a.m.～6:00p.m.



1. 「跳」(2013) W268×D88×H194cm アルミニウム、金箔、銀箔 JAFRA「エキからエコ。」キャンペーン
2. 「生と静」(2012) W97×D36×H57cm アルミニウム、金箔、銀箔 JAFRA「エキからエコ。」キャンペーン
3. 「飛翔」(2009) W150×D150×H600cm アルミニウム、金箔、銀箔 JAFRA「エキからエコ。」キャンペーン
4. 「翔」(2011) W75×D22×H73cm ステンレス、チタン、真鍮、金箔、銀箔 JAFRA「エキからエコ。」キャンペーン
5. 「シュプリングン」(2006) W50×D20×H52cm ステンレス、真鍮、金箔、銀箔 JAFRA「エキからエコ。」キャンペーン

なぜイルカなんですか？

なぜイルカなんですか？

実際に口に出して訊くかどうかは別にして、僕の作品に接して、まずみんなが抱く疑問でしょう？

あれは僕が45歳のときだから、かれこれ四半世紀近く前のことになるのかな。マイスターの工芸技術を学ぼうと、ドイツに約1年間、在外研究員として留学した。ちょっと「日本脱出」の気分があった。

ハンブルクの工芸美術博物館の収蔵庫には刀とか鑢とか見事な日本の美術品がたくさんあった。あるとき僕は梅酢や大根おろしや米ぬかを使う日本古来の独自の金属処理方法を伝えた。よみがえった美術品を見て、ドイツ人たちがどれほど感動したか。

でも僕は逆にそのことに感動させられた。それまでは西洋芸術にかぶれて超具象、超抽象の作品をつくり続けていた僕は、日本の金属工芸が持つ伝統技法のすばらしさを再認識し、日本人としての誇りを持って帰国することになった。帰国したはいけれど、じゃあいったい日本らしさって何だろう？となると、これがよくわからない、困った、となる。

でもあるとき、生まれ故郷の佐渡から東京に戻るフェリーのうえで思い出したんだ。ずっと昔、藝大を受験するために佐渡から小さな連絡船で上京するときに、僕はイルカの群れを見た！と

いうことを。

18歳、2月の寒いころだった。連絡船は白い航跡を描いて佐渡からどんどん離れていく。なんだか寂しくて、雪で覆われた佐渡島を甲板から眺めていると、荒波の中を白いしぶきをあげてビュンビュン跳ぶように泳ぐ黒い一群が目飛び込んできた。初めて見るイルカの群れだった。

その鮮烈な映像は目に焼き付いていて、自分にとっての日本はここにあるんじゃないかと思った。それから20年余り、僕は夢とエネルギーをイルカに注ぐことになる。佐渡にはイルカの神様が人を助ける民話があるけれど、僕はイルカに助けられたのかもしれない。

今回展示するのは、新たな挑戦を試みた2つの作品だ。

「跳」は、2012年にカリブ海のバハマ諸島の海に潜って、生まれて初めてイルカたちと一緒に泳いだ体験から生まれた。水中で目にするイルカたちの動きは、海面を泳ぐイルカの躍動感とはまったく違って、とんでもなくきれいだった。

恐れを超えて自分が彼らと同じくらい水に親しんだとき、初めて彼らは仲間だと思って一緒に泳いでくれる。そのときの感動が、この作品の核にある。

「シュプリングエン『翔』」の主演は、イルカ以上に波のすごさかもしれない。子どものころ、佐

宮田亮平(金工作家、東京藝術大学学長)

渡に台風が来たときは海辺にあったわが家に波が押し寄せてきて、もう一つ大きな波が来たらわが家はさらわれるんじゃないかと身がすくんだ。いつもはあんなに静かで豊かな恵みを与えてくれる海が、時としてこんなに牙をむくものなのか。あの高波は今もはっきりと覚えている。

この作品は波の図面をコンピューターで描き、レーザーカットで造形した。素材はステンレスとチタン。チタンは電圧のかけ方でいろいろな発色をする。新しい技法と素材の面白さを生かしてみた。

日本の技法すなわち手仕事というわけではない。伝統にこだわりすぎると、結局カビの生えた文化財になりかねない。もちろん手仕事でなければできない仕事もあるけれど、コンピューターを使った仕事が新たな世界を切り拓き、逆に古いものをよみがえらせることがあるかもしれない。

過去と現代。二つを併せ持つものが、つまるところ「今」という時代を指し示すものになると思う。

僕はイルカが大好きだけど、だからイルカを作っているわけじゃなくて、このごろはイルカというみんなに愛される対象をもしかしたら媒体として使っているんじゃないかと思ってきた。作品はどこかで誰かと接したときに芸術に昇華

すると思う。その接点に今は長いつきあいのイルカの姿を借りているのかな、という感じがちよっとしている。

そう、僕はイルカだけをつくりたいわけじゃない、ということだろうね。

だから、なぜイルカなんですか？と訊かれるなら、いや、それはイルカでなくてもいいのかもしれない。

じゃあ今後はどうなるか？

それは分からない。

ギャラリーで3カ月にわたって展示するという「ロングラン展示会」は、僕にとっては初めての経験となる。

3カ月の会期中、僕はこの会場に繰り返し足を運ぶ。そのとき、こちらの感情が昂ぶっているときも鎮まっているときも、全く変わらない静かな空間で自分の作品と向き合うことになるだろう。

そのとき、自分にどんな変化が生じるのかを自分自身で体験したい。シンプルに作品を空間に置くという試みが、今の自分をあらためて問い直す貴重な機会となるはずだ。

その体験が次の作品につながるきっかけになる予感がする。いや、でも違うかな。

(了)



宮田亮平

Ryohei Miyata

- 1945 新潟県佐渡に生まれる
- 1970 東京藝術大学 美術学部工芸科 鍛金専攻 卒業
- 1972 東京藝術大学大学院 美術研究科 工芸専門課程 鍛金専攻 修了
- 1990 文部省在外研究員(ドイツ)、個展(ドイツ)
- 1996 中国・北京中央工芸美術学院 特別講師
- 1997 東京藝術大学 教授
- 1999 「宮田 亮平 金工展」ギャラリー日鉱(東京)
「清洲インターナショナルクラフトビエンナーレ '99」(韓国)
「'99ソウル京城国際金工作家招待展」(韓国)
- 2001 「九つの音色展」三越(日本橋本店)、『03 '04(韓国)、『05 '07(東京)、『06(北京)、『09(東京・福岡)
- 2002 「宮田 亮平 金工展」伊勢丹(新潟)、銀座和光(東京)
- 2004 「宮田 亮平 金工展」三越(日本橋本店)
- 2005 東京藝術大学 学長
- 2007 「宮田 亮平 金工展」三越(日本橋本店・新潟店)
- 2008 「宮田 亮平・琴 親子展」雪楽舎美術館(新潟)、「宮田 亮平 金工展」高島屋(日本橋店)
- 2010 「宮田 亮平 展」三越(日本橋本店・仙台店)
- 2011 「宮田 亮平 展」大丸松坂屋(松坂屋名古屋店・大丸大阪心齋橋店)
- 2013 「宮田 亮平 展」高島屋(日本橋店・横浜店・大阪店・ジェイアール名古屋店)
- 現在 東京藝術大学 学長
文部科学省「文化審議会」：委員(会長)
日本放送協会「経営委員会」：委員
日展：理事
現代工芸美術家協会：常務理事
日本相撲協会「横綱審議委員会」：委員
文化財保護・芸術研究助成財団：理事長 他

受賞歴

- 1972 第11回「日本現代工芸美術展」大賞、読売新聞社賞、日本TV賞 受賞
- 1979 第18回「日本現代工芸美術展」文部大臣賞 受賞
- 1981 第13回「日展」特選 受賞
- 1997 第29回「日展」特選 受賞
- 2007 第46回「日本現代工芸美術展」内閣総理大臣賞 受賞
- 2009 第41回「日展」内閣総理大臣賞 受賞
- 2012 第68回 日本芸術院賞 受賞



LIXIL GALLERY
東京都中央区京橋3-6-18 東京建物京橋ビル LIXIL：GINZA 2F
phone 03-5250-6530
制作発行：株式会社 LIXIL デザイン：SOUVENIR DESIGN INC.
url <http://www1.lixil.co.jp/gallery/>
facebook [facebook.com/LIXIL.culture](https://www.facebook.com/LIXIL.culture)

